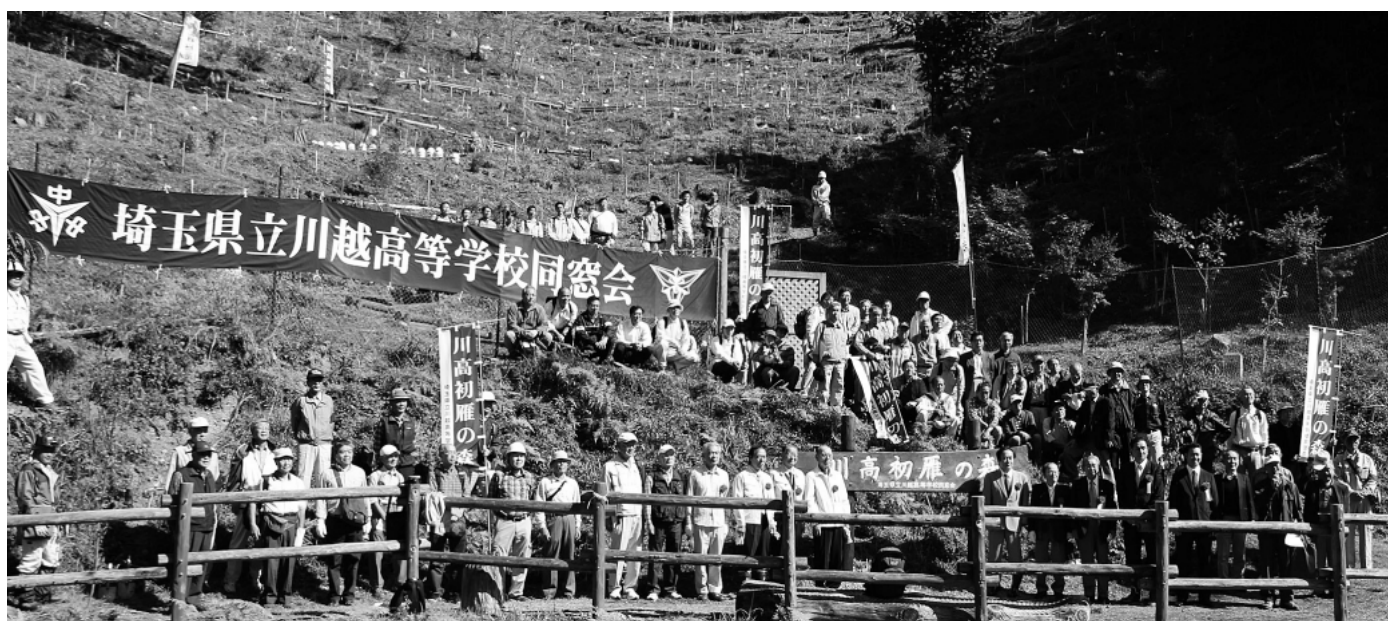


川高同窓会報

埼玉県立川越高等学校同窓会
〒350-0053 川越市郭町2-6 川越高校内

【同窓会】電話・FAX (049) 225-9071 (直通) <http://alumni.gnk.cc/kawagoe/>
【学 校】電話 (049) 222-0224 (学校) <http://www.kawagoe-h.spec.ed.jp/>

「川高初雁の森」第1回植樹祭開催



▲10月21日(日)、抜けるような秋晴れの中、植樹祭には上田知事、沢辺飯能市長、和田県議、砂長飯能市議会議員、松下校長にご出席いただき、OB、県、飯能市職員など120名が参加して開催された。

◀7月23日(月)、「埼玉県森林づくり協定」を埼玉県、飯能市、川越高校同窓会の三者で結ぶ。

目次

会長挨拶 会長 田中 正	2
新校長挨拶 細田 宏	2
前校長挨拶 松下幸夫	2
母校だより(一)	3
人事異動・退職、転任挨拶	
「川高初雁の森」	
第一回植樹祭開催	4
秋季散策会	5
25年度案内・在京初雁会	
24年度報告・越生初雁会	
特集	
「各部OB会のあゆみ」	6
定時制分校ものがたり	10
同期会・各地区初雁会の活動	12
中42回・高3回・高6回・高21回	
高52回・嵐山初雁会・在京初雁会	
くすの木俳句大会	15
植樹料・終身会費御礼	15
会員投稿	16
川越市の鳥 故・佐久間勇次(中38)	17
母校だより(二)	17
SSH報告	18
母校だより(三)	18
進学状況、部活動報告	
初代校長増野悦興の謎(最終回)	19
総会のご案内	20
事務局より・編集後記	20



ごあいさつ

会長 田中 正

会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

五月二十七日開催の同窓会総会で地域貢献事業として「森林づくり」を提案、満場一致で承認されました。場所は飯能市所有で下名栗の名栗湖畔2・53haです。六月開催の会長・副会長会議で森林づくり推進母体として「川高初雁の森」事業部会を設立。森林事業に精通している飯能初雁会市川会長にご就任頂きました。松下校長および各初雁会の会長は顧問に就任頂き、在校生も含め川高総力を結集する体制を整えました。

七月二十三日に埼玉県、飯能市、同窓会で「埼玉県森林づくり協定」を締結、十月二十一日に「植樹祭」を実施しました。当日は上田埼玉県知事、沢辺飯能市長および県・市の関係者、多くの同窓生にもご参加頂き、秋晴れのもと盛大に開催致しました。今回約1haに植樹しましたが、残り1・53haは本年度に植樹、除

伐を実施する予定です。

なお、森林づくりは長期的なものになりますので、植樹料として一口二千元以上の納入をとりあえず各初雁会の連絡網でお願い致しました。早速、多額のご協力を頂き厚くお礼申し上げます。立派な森林を完成させたいと考えております。

散策会は越生初雁会主催で史跡の説明を受けながら楽しく散策致しました。懇親会は「ニューサンピア埼玉おごせ」で行い、大変有意義な一日を過ごしました。同窓会総会の記念講演は(株)日建設計の吉野繁氏(高31)に「六三四(むさし)」を指して」という演題で講演頂きました。吉野氏は意匠・設計のリーダーを務められましたが、世界に誇る東京スカイツリー完成の苦労話を聞き感動致しました。本年度はまず「川高初雁の森」の完成に一層力を入れようと思っています。会員の皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

着任にあたり



校長 細田 宏

平成二十五年四月一日付けで、前任の松下幸夫校長の後任として着任いたしました細田宏と申します。三月末に、県教育委員会から校長としての内示をいただき

いた時には、大変に名誉なことであり、精一杯頑張ろうと考えたのですが、改めて本校の歴史と伝統を振り返りつつ、今、本校に期待されていることについて

思いを巡らせますと、その職責の重さに身の引き締まる今日この頃でございます。私は本校に昭和四十五年四月に入学し、昭和五十九年四月からは数学の教諭として八年間勤務させていただきました。本校の象徴であるくすの木の下に、今回、三回目の籍を置くことができますことは、この上ない幸せと感じております。



退任にあたって

前校長 松下 幸夫

平成二十一年四月から本校第三十四代校長としてお世話になりましたが、この三月をもって定年退職いたしました。在任中、同窓会の皆様には本校の教育活動に對しまして物心両面にわたりご支援ご協力、誠にありがとうございました。

川越高校は自他共に認める埼玉県を代表する歴史と伝統のある進学校で、本校の生徒や保護者のみならず県民全体からも期待が寄せられております。そのような学校に校長として勤務することは大変な重責でありました。

この四年間、生徒の希望大学進学を実現し本校の生徒、保護者、OB、さらには県全体から寄せられる熱い期待に少しでも応えられるよう、本校教職員の持つ力を集め私のこれまでの経験の全てを生かし微力ながら全力で職責にあたりまいりました。

着任した平成二十一年は川越高校創立

うな中、私は校長として教職員の持てる力を一つにまとめ、不易である本校のよき伝統はしっかりと守りつつ、時代の流行をしつかりと見つめ、生徒そして保護者の期待に応える教育活動を全力で展開してまいりたいと考えております。

田中正会長様をはじめ、同窓会員の皆様には今までと変わらぬご支援を賜り、母校の更なる発展のため努力してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

百十周年にあたり会員名簿第十九号が発刊された年でありました。田中同窓会長と並んで、発刊の辞を載せさせていただきましたことは最高の荣誉でありました。

何事にも一生懸命取り組み礼儀正しく優秀で素晴らしい生徒、本校の教育方針を理解し大きな信頼を寄せていただいている保護者の皆さま、生徒の状況を正確に把握し愛情と熱意に溢れる専門性の高い教員、いつでも遠くから温かく見守り支援してくださる同窓会の皆さま、県を代表する伝統校を有し地域の誇りとして声援をいただいている地元の皆さま、それら全ての本校関係者の皆さまとともに母校川越高校がますます限り無く発展していくことと強く確信しております。

未来永劫続く川越高校の輝かしい歴史の一页を刻ませていただけたことは、高校教員として無上の幸せでありました。四年間ありがとうございました。

この間、学年を二周り、合計6回の担任を通じ卒業生を2回送り出すことができました。川越高校は大きく変貌を遂げた時期であったと思います。70分授業が始まり、SSHが始まり、教員も多く入れ替わりました。また同時に、くすのき祭、球技大会、強歩大会等は生徒の自主性と共により伝統が守られてきたことをうれしく思います。また、個人的には、国際交流事業でのオーストラリアへの生徒引率が思い出深く残っています。積極的に参加し、コミュニケーションを取ろうとする生徒たちの姿勢は頼もしく、新鮮で、私にとっても大きな刺激になりました。

英語を教える上で示唆に富み多くのヒントを与えてくれました。川越高校のより一層の発展を祈念し感謝の言葉とさせていただきます。

「川高初雁の森」

第一回植樹祭開催

数年をかけて計画し、平成24年の定期総会で承認され実現した「川高初雁の森」第一回植樹祭が、埼玉県知事、飯能市長、川高校長など多くの来賓にご出席頂き、晴天の下、飯能市下名栗の「川高初雁の森」で開催された。

この森は、埼玉県「森林づくり協定」によるもので、7月23日、埼玉県・飯能市・川越高校同窓会の三者が協定書に署名し事業がスタートした。



10月21日(日)、植樹祭が開催された。9時半、植樹祭に参加したOB約80名は、まず近くで行われた「名栗ふるさと祭り」に参加、開会式で田中同窓会会長が、「川高初雁の森」に地元飯能市のご協力があつたことを感謝する旨の挨拶を行う。

その後、現地に移動し10時半から、第一回植樹祭を開催した。植樹祭には森林づくりの協定者として上田埼玉県知事、沢辺飯能市長、来賓として地元選出の和田県議会議員、砂長飯能市議会議員、松下川高校長をはじめOB、県庁・市役所職員など120名余りが参加した。

田中同窓会会長は、挨拶で「川高初雁の森」づくりに至る経緯を述べた後、幹旋・調整いただいた県、森を貸していただき、

「森の番人」などを通じて森づくりの手助けをいただく飯能市へお礼を述べた後、今後も川高在校生とも協力し積極的に森づくりを推進していく旨を述べた。

上田知事は、埼玉県は森林づくりを重要政策として掲げていること、それに川高同窓会が積極的に参加してくれたことへの感謝と今後のサポートを約束。沢辺飯能市長からは、飯能市で森づくりを推進することへの歓迎と感謝、また全面的なサポートを約束する挨拶があった。

記念植樹は、県・市・同窓会とに別れ、同窓会は、田中会長、市川事業部会長、原田副会長、松下校長が我が校のシンボルであるクスノキを植樹し、県と市がヤマザクラを植樹した。

右から、田中会長・入間初雁会
原田会長・松下校長



左から、上田知事・
市川事業部長・和田県議



右から、沢辺市長・砂長議長



記念植樹最後、約0.5haに県知事、市長を含め参加者全員でヤマツツジなど350本を植樹した。

《川高初雁の森》

川高初雁の森は、飯能市下名栗、有馬ダムそば名栗湖左岸の飯能市所有の山2.5haを第一期5年間借用して、花の咲く樹木を中心に森づくりを行うものであり、事業部会を設け計画を推進してきた。

同窓会の地域貢献事業のひとつであり、同窓生間の交流、川高在校生の科学授業の一環をも目指す事業である。埼玉の県立高校では既に、浦和高校、熊谷高校、浦和一女、秩父農工科学高の4校が既に取り組んでいる。名栗湖を臨む斜面で植樹



「さわらびの湯」で懇親会



司会は、渡辺事業部会幹事長。市川事業部会長の挨拶の後、原田副会長の音頭で乾杯。一汗かいた後とあつて、ビールも進んだ。「川高初雁の森」の計画実行にあたり、ご指導いただいた浦和高校同窓会の小島前事務局長、鯨井事務局長に植樹および懇親会に参加いただいた。

今後の展開へのお願い

第二回植樹祭は、平成25年9月29日(日)を予定。在校生も参加し植樹を行います。

同総会ホームページに「川高初雁の森」コーナーを新設しました。

別添のように、植樹料を募集しております。振込用紙を会報に同封いたしました。趣旨にご理解、ご協力いただきたいと思います。

秋季散策会

25年度のお誘い

在京初雁会

隅田川と東京湾のクルージングはいかがですか。

1 日時

10月12日(土) 10:00

2 集合場所

東京水辺ライン「両国発着場」

3 散策会出発

10:20 ~ 12:20 (2時間)

4 懇親会

12:30 ~ 14:30 (2時間)

5 会費(乗船代込み)

「大江戸八百八町・花の舞」

6000円

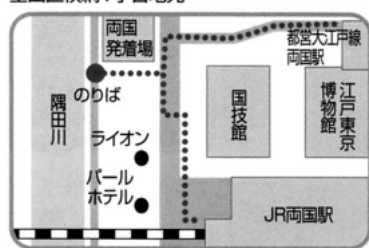
(同伴者4000円)

「クルージングコース」

「両国発着場」↓上流の言問



両国(りょうごく)
墨田区横網1丁目地先



●JR総武線両国駅西口より徒歩約3分
●都営大江戸線両国駅A3出口より徒歩約6分

「集合場所」

橋(東京スカイツリーを水上から見ます)↓(隅田川を下ります)

勝鬨橋・清洲橋・永代橋・イボリーブリッジ↓東京ゲートブリッジ↓隅田川↓両国発着場で下船・徒歩3分↓懇親会会場両国駅構内「花の舞」

24年度

秋季散策会報告

越生初雁会

「里山の自然を歩いて」

同窓会人気行事「秋季散策会」の越生開催が決まったとたん協力スタッフの申込が24人、会員数70人の何と3人に1人、関心の高さと協力体制の絆を感じさせた。

10月14日(日)汗ばむような秋晴れのなか午前10時集合場所の越生中央公民館をスタートした。

参加者は72名、コースは五大尊(平安仏の五大明王が祀られた御堂)↓弘法山(弁財天を祀る)山裾↓津久根八幡神社(鎌倉時代創建)↓田代三喜生誕地(室町時代の名医)↓最勝寺(源頼



の言葉、ペー参加の弓削多光一(高4)夫妻の感想、来年開催の在京初雁会・西信之副会長の抱負と続き、和氣満々に進行、最後は全員の校歌斉唱で幕を閉じた

朝が創建した真言宗寺)。コース解説は酒本忠雄(越生町史編纂室長)高6)石川久明(越生図書館長)の二人。津久根八幡では秋の例大祭の最中、獅子舞保存会に依る古式豊かな獅子舞が披露され、参加者を魅了した。

1のグランドピアノが我々の出席に合わせ校歌「紫匂う」を演奏してくれ感激ひとしおであった。運営にあたった越生初雁会として参加者皆さんが笑顔で帰られたことが何より嬉しかった。

アップダウンはさほど無いが、懇親会場へ至る最後のだらだら坂が少々きつい。そこでショートカット3・5kmのBコースを設定したが、結果そちらを選んだのは4・5人、我々の心配は杞憂に過ぎない健脚ぶりだった。

懇親会場の「ニューサンピア埼玉おごせ」前では武蔵越生高校(一川高)理事長川高15回)和太鼓部による勇壮な和太鼓の響が参加者を出迎え、花を添えた。

午後一時から始まった懇親会は田中同窓会長の挨拶に始まり、参加者最高年齢の中島一氏(高2)

事務局長・新井康之(高15)



特集

川越高校
各部活動OB会の
あゆみと活動

川越高校の文化部・運動部合わせて42の部活動が誕生し、現在は37のクラブが活動を行っている。うち18の部がOB会を組織し、現役部員に対する支援活動またOB間の親睦・交流活動を行っている。以下の本文は、各部に求めた結果であるが、取材に浅れがあることも考えられ、本文の表等に誤りがあれば、同窓会事務局までご一報願いたい。

OB会があると答えた部活動は、正式なOB会の発足の古い順に並べると「野球部」「音楽部」「蹴球部」「応援団」「剣道部」「山岳部」「卓球部」「水泳部」「弦楽合奏部」「柔道部」「陸上競技部」「籠球部」と続き、発足月日こそ不確かではあるが「吹奏楽部」「美術部」「排球部」「ラグビー部」「ソフトテニス部」「硬式テニス部」にOB会がある。またOBが学年単位や顧問を囲む会を開催する部活動もあると聞く。

校(川越中学校)設立20年目だ。川中時代は、大会への参加校が少なかったとはいえ、常に優勝を争う県内有数の強豪校であったという。昭和6年4月には、甲子園春の大会に出場。野本主将が選手宣誓を行った。昭和34年夏、全国高等学校野球選手権大会で念願の甲子園出場を果たし、1回戦で熊本県代表の鎮西高校に勝利し「紫匂う…」川越高校校歌が流れたこと。この二つが野球部の誇りである。プロ野球、社会人野球そして大学野球の名プレイヤーを多く輩出してきた。

野球部OB会

野球部は大正8年に創部されたという記録がある。第三中学

昭和26年に創設された「川越倶楽部」を前身に、昭和51年6月「川高野球部OB会」と改称し現在に至る。毎年、年会費を徴収し、その

浄財をもとに会員相互の親睦、また現役チームへの技術的応援と資金的援助を行っている。

親睦面では、年2回ゴルフコンペを開催。毎回20〜30名が参加し、上は80歳代から下は20歳代のOBが、この時ばかりは先輩後輩もなくゴルフプレーを満喫する。また若手(年配者もいるが)のOBが主体となってマスターズ甲子園を目指したチームを結成し、現役時代に戻り白球を追いかけ甲子園出場を目標に頑張っている。既にチーム結成以来2度のマスターズ甲子園出場を果たしている。

現役チームへの支援は、資金面での援助はもとよりマスターズチームのメンバーに加え、何人かのOB達が直接グラウンドに出向き、監督とは違った観点から選手達にアドバイスしている。

剣道部OB会

剣道部は、明治34年、川越中学校撃剣部としてスタートし、その後、剣道部と名称変更し現在に至っている。

戦後、剣道が禁止されていたが昭和29年に復活した。個々には優秀な選手も出たが、全体としては低迷状況にあった。しかし昭和37年に東京教育大学を卒業された豊島正夫顧問の就任を機に、県内トップクラスの強豪校へと生まれ変わった。6年間にわたり隔年で行われ

た「1000日寒稽古」、年間150〜180回もの練習試合、春夏の合同合宿…。この間インターハイ県大会優勝3回、インターハイ個人出場6名、関東大会14年連続出場など「剣道の川高」の名を高らしめた。

OB会は、後輩への資金面での支援とOB間の親睦を深めることを目的に平成4年に発足、当初の活動は、部報「剛旗」の発行と夏合宿や総会時に現役部員との稽古を行うことが中心だった。その後、剣道は生涯スポーツとして年齢性別を問わず楽しめることから、毎月1回現役生を交え「OB稽古会」を行うこととし20歳代から70歳代までのOBが参加している。



蹴球部OB会

蹴球部は昭和7年に創部された。OB会は昭和60年1月に発足した。主な活動は、金銭を中心に現役部活動を支援するほか、毎年1月3日、現役部員との交流試合と新春懇談を開催するほか、若手OBを中心に川高蹴球会というチームをつくり埼玉県リーグに参戦している。

毎年12月に会報を発行、今年度は760部を送出した。

陸上競技部OB会

同期生同士で個別に川越高校最初の陸上競技部顧問・松本利雄先生を囲む会が開催されていたが、20年ほど前、定期的に集うかとの話がまとまり「川高紫陸友会」が発足、年に数回ゴルフや散策会などを楽しんでいる。平成16年、当時の小島顧問から「予算が少なく、援助してもらえたらありがたい」との申し出があり。翌年2月、川高紫陸友会第6回定期総会にて「陸上競技部から支援要請があったこと。支援には、全OB対象のOB会が必要なこと」を提案し了承された。約1年の準備期間を経て、平成18年2月29日、200余名が出席した設立総会で「埼玉県立川越高等学校陸上競技部OB会」が正式に発足した。発足以来毎年、活動支援金、春夏合宿激励金、関東大会全国大会出場激励金などの金銭的な支援に加え、練習・競技環境の整備・充実用具の提供のほか、各競技会での応援。練習方法などのアドバイスを行っている。2年に1度開催される総会では、現役部員も出席、多くのOBとの交流が実現している。また、OB会の総会では唯一、応援部が友情出演し、見事な演技を見せてくれている。

各部OB会一覧(平成24年5月現在)

部活名称	部員	OB会名	発足	会員数	総会	会報	ホームページアドレスなど
応援	23	応援団OB会	H2年				現在活動休止中
吹奏楽	98	吹奏楽部OB会		1,500	年1回	なし	http://site.kawagoekoob/obdayori
音楽	65	音楽部OB会	S45年	1,300			
美術	4	美術部OB会	H11年	74	なし	なし	
弦楽合奏	24	弦楽合奏部OB会	H14年	128	なし	なし	
水泳	45	水泳部OB会	H11年	750	3年1回	あり	http://www.kawataka.com/swinob/index.htm
ソフトテニス	30	ソフトテニス部OB会		520	隔年		
山岳	19	山岳部OB会	H8年				
卓球	31	卓球部OB会	H10年	514	年1回	なし	http://www.goecites.jp/kawatakatt
籠球	42	バスケットボール部OB会	H20年	600	設立時	なし	
野球	52	野球部OB会	S51年	650	年1回	年2回	
蹴球	71	蹴球部OB会	S60年	1,000	年1回	あり	
剣道	19	剣道部OB会	H4年	450	年1回	随時	
柔道	15	柔道クラブ	H16年	450	年1回	年1回	
陸上競技	51	陸上競技部OB会	H18年	850	隔年	隔年	http://rikujo.k-alumni.org/
排球	23	排球部OB会		450	隔年	あり	http://s44.teacup.com/kawatakaVB/bbs
ラグビー	30	ラグビー部OB会	H18年	488	年1回	—	
硬式テニス	50	テニス部OB会	H25年	25	—	—	



吹奏楽部創部50周年記念演奏会(平成24年6月)

埼玉県立川越高等学校の部活動

新聞部、応援部、放送部、吹奏楽部、英語部、映視研、(写真部) 物理部、化学部、生物部、地学部、音楽部、(郷土部) 美術部、書道部、(航空部) (ラジオ部) (JRC部) 文芸部、(人文科学部) 古典ギター部、将棋部、軽音楽部、弦楽合奏部、(弁論部) 水泳部、軟式庭球部、山岳部、卓球部、籠球部、野球部、蹴球部、体操部、剣道部、柔道部、弓道部、陸上競技部、排球部、バトミントン部、ラグビー部、硬式テニス部、演劇同好会、料理同好会

() 付きの部は、現在活動停止中。平成24年度は、1年生371名、2年生373名、3年生362名、合計1106名が各部に所属し活動している。

吹奏楽部OB会

OB会の主な活動は、毎年開催される定期演奏会で受付や会場案内などの裏方に徹することである。平成24年6月には、創部50周年記念演奏会と記念パーティーを開催。演奏会では多くのOBが未だ若らぬ腕前を披露した。5年ごとに記念パーティーを開催するほか、創部30周年誌、50周年誌を刊行した。

卓球部OB会



卓球部は1948年に創部された。昭和23年度卒の卒業1回生が創部メンバーである。伝統行事である「津坂杯」は昭和30年7月23日に第1回が開催された。「津坂杯」は大学進学後、練習中に転倒して帰らぬ人となった津坂宗貞氏(高5回)を偲びOBと現役生が交流試合を行った。その後、津坂氏の命日にあわせ初夏に行い、平成19年には第50回を迎えた。この時、記念誌「絆」(70頁)を刊行した。毎回60〜90名が参加する伝統行事であり卓球部の誇りでもある。OB会は、平成10年6月に「津

弦楽合奏部OB会

弦楽合奏部は、各音楽祭参加のため日々練習を重ねている。主な演奏会は、新入生歓迎会、毎年5月の定期演奏会、バイオリン教室演奏会への賛助演奏、くすのき祭、西部地区高等学校音楽祭など、また老人ホームでの演奏会も行っている。OB会は平成14年頃に発足した。部員数も少なく規模も小さいためOB会としての決まった活動はな



卓球部OB会(第54回津坂杯)

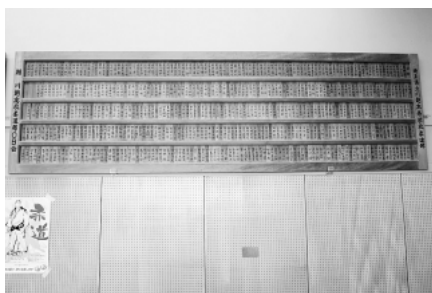
坂杯」の継承とOB間の親睦を目的に発足させた。OB会の発足に伴い、主に現役部員が中心となって運営されてきた「津坂杯」はOB会が主体的に運営するようになった。ホームページでは津坂杯その時々写真や記事を掲載している。

いが、OB会長は毎年5月の定期演奏会後に、1学年下の代に引き継がれている。

柔道クラブ

平成16年に発足。以来毎年2月に恩師をお招きし、氷川会館でOB回総会を開催、今年20回を迎えた。

主な活動は、現役部員に対する用品の提供や運営に対する補助、1月1日に開催される元旦稽古への協力などである。また、試合の応援は随時行っている。



柔道場には、柔道部の歴代部員の名札版が掲示されている。

排球部OB会

創部は、昭和25年。昭和27年春季県大会優勝、29年秋季県大会優勝、30年全日本埼玉県大会優勝、44年学総体県大会優勝、48年県新人戦優勝、51年県新人戦優勝、西関東大会優勝など好成績を挙げてきた。

毎年7月末にOB理事会、毎年1月3日に現役激励会・懇親

会を開催している。

山岳部OB会

川越高校山岳部OB会は、平成8年11月23日に設立された。

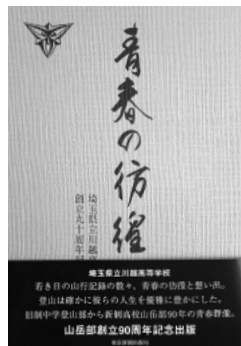
それ以前のOB相互の交流は、有志での山行が時々行われていた。OB会設立以降は、年2回(春・秋)の合同山行(会の公式行事)が、幹事団のもと着実に実施されるようになった。

平成9年の春に始まった合同山行も昨年で早16年目、関東近縁の日帰り可能な主な山は、ほぼ登り尽した感がある。そのような理由で選ばれたのかは定かではないが、昨年の春は、5月19日に奥秩父の南天山(1483m)に行ってきた。一般的には無名な、いわば「通」な山である。紅葉で有名な中津川沿いに車を走らせ、鎌倉沢という支流沿いの登山ルートを登る。天気も良く沢登りのような気持ちの良い一日であった。

秋の山行は11月10日、軽井沢近郊の八風山(81315m)であった。これまた地味な山で、その昔ハイキングが娯楽の王様であった時代にはよく登られたようである。現在では上る人はほとんどなく、忘れられたかのようである。静けさに加え、山全体に漂う寂寥感がたまらなく印象的であった。

今年は、春は鼻曲山、秋に籠ノ登山を予定している。

『山岳部創立90周年記念誌』2009年5月10日発行



応援団OB会

それまで生徒有志によって行われてきた応援活動が、生徒会のクラブとして認められた高13回生を初代として創部された。平成22年10月、故内河好博氏(高14回)の声掛けにより発足。現在は活動を停止しているが、今年応援団OBの有志がマスターズ甲子園で活躍した。



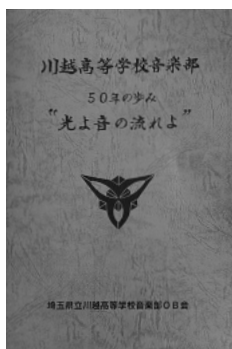
音楽部OB会

OB会は昭和45年に発足し、

現在1,300名の会員がいる。平成12年に『50年のあゆみ―光よ音の流れよ』を発刊。



平成22年には、創立60周年の記念行事を行うとともに『光よ音の流れよ―創立60周年記念愛唱歌集』を発行した。



平成25年3月31日に、「牧野統 没後40年メモリアル演奏会」を川越市やまぶき会館大ホールで開催した。



ラグビー部OB会

OB会ができて10年余り、我が会の特色は、現役部員との交流の多さだろう。

24年6月23日、創部30周年を記念してOB会現役部員合同で交流試合を開催した。ラグビーのメッカ熊谷ラグビー場に所沢北高校を迎え、現役、OB、現役OB合同チームが計4試合を行った。OBは130名余りが集合、試合前には子供を含めた練習も行われ楽しむと同時に家族に「戦う雄姿」を見てもらうことができた。これからもこのような交流を続けて行きたい。



硬式テニス部OB会

25年1月から活動を開始。テニス場賃貸料の補助、練習試合などの活動をスタートさせた。

会発足から間がないため具体的な活動はまだないが、他部OB会を見直して、交流と支援活動を充実させていくつもりだ。

OB会活動NOW

《美術部OB会の活動》

「第三回紫縁展」開催

川高OB美術展実行委員会主催
1999年10月に川高創立百周年記念事業の一環として、美術・書道・展が本川越駅ビルペホール・アトラスで開催され、美術部の卒業生および顧問の先生が多数参加出品し百周年を祝った。

その時の参加者が中心となり名称を『紫縁展』川高美術部OB展実行委員会が発足した。2007年と2009年に展覧会を川越市立美術館にて開催した。今回より参加者を美術部関係者のみでなく、名称を川高OB美術展実行委員会と改め、全ての卒業生に参加を呼びかけ、今年2月5日から10日まで川越市立美術館市民ギャラリーで開催した。美術部顧問であった故大沢寛先生はじめ、ミラノ在住の彫刻家長澤英俊さんなど35名の出品者を迎え絵画・彫刻・版画・陶芸など広い分野の作品が展示



された。多くの来場者を迎えて終日会場は芸術論議に花が咲いた。

会期中の2月9日。会場近くの一貫で懇親会を開き、皆が久しぶりの再会に親睦を深めた。

《野球部OB会の活動》

マスターズ甲子園報告

埼玉県予選は、宿敵大宮工業に圧勝して甲子園に乗り込みました。二度目の出場となり、チームはもとより、応援部OB会、吹奏楽部OB会ともども団結は一層強固なものとなりました。

11月10日(土)第1試合、相手は富山県代表の高岡商業高校で、春夏合わせて20回の甲子園出場を誇り、プロ・社会人野球に多くの人材を輩出している。今回も甲子園経験者が10名を超えている。



そんな中で、前半、中盤と拮抗した試合経過となり健闘したが、後半失速し1対5で時間切れとともに敗退した。

選手は緊張しつつも楽しくプレーでき、応援団・吹奏楽演奏の秩序ある応援は、最高の出来との評価を得ました。



吹奏楽部・応援団各OBの大応援

これも、同窓会からの支援金を含め多くの方からの援助があったことによります。ありがとうございました。

《陸上競技部OB会の活動》

応援活動

陸上競技会は、年間数十日開催されるが、多くのOB会メンバーが揃いのジャージで応援に行き風物詩の一つとなっている。

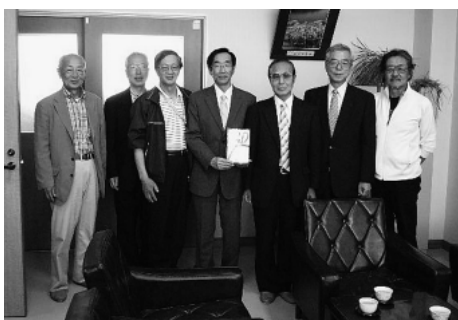
特に、1月に開催される奥むさし駅伝にはOBチームも出場。今年は、OB3チーム現役1チームが走り、飯能初雁会のご協

力の下、各中継所で着替え所を借りていただき、OB30名余りが応援した。

石巻高校との交流

3・11の大震災には、OB会が直に反応し、義捐金を募集した。対象が分かる支援をすることとし、仙台在住OBの縁から宮城県石巻高校と決め、義捐金60万円余りを持参し、当時の須藤校長へ直接お渡しした。

同年、北上で開催されたインターハイに部員が出場した時には、石巻高校陸上競技部員が応援に駆けつけてくれた。昨年開催されたOB会総会には、同校同窓会「仙台鰯陵会」杉本会長にご出席いただき再度、義捐金をお渡しすることができた。



石巻高校校長室にて

その縁で、我が校ラグビー部がボランティア活動を兼ねた夏合宿を企画した際、石巻高校に合宿所を提供いただき、合同練習を行うことができた。被災地

の現状と体験談は、部員たちに深い印象を与えることも出来たという。この絆を繋いでいくことが我がOB会の重要な活動の柱の一つとなっている。

走・爛・覧芸術展

川越高校のモットーである文武両道を広く知っていただくためのイベントが「走・爛・覧芸術展」である。24年11月に開催した第2回展では、OBの作品に加え、川女陸上部OGや川高の他部OBにもご協力いただき、書画・写真・俳句などを来場いただいた300名を超える皆さまにご鑑賞いただいた。



会場入口の看板も作品のひとつ

また、ベルリンオリンピックに出場した鈴木聞多コーナーでは先輩の遺品を展示し、東日本大震災コーナーでは石巻の現状や同校との交流を展示し「義捐金箱」には多くの募金を頂き、3度目となる義捐金を石巻にお届けすることが出来た。

定時制分校ものがたり

所沢分校の歩み

校舎の整備

一九四八年(昭和二三)年四月定時制課程設置に伴い、県立川越高等学校所沢分校として九月十五日開校した。当初は所沢中学(四九年二月まで使用、同年四月十五日より所沢高校女子部と共用授業)と校舎共用であった。



開校時玄関

められることとなった。

所沢分校の施設は、一八九八(明治三一)年建築の校舎であり、老朽ぶりは目に余るものであった。明治、大正、昭和の三代のお勤めをとげ、雨につけ、雪につけ雨が漏るのでなく降ったものである。

一九五三(昭和二八)年六月には県下二四分校のなかから老朽校舎の代表として、国会の文教委員や定時制教育振興会長の視察を受けたものであった。

第二代主任の新井弘達先生は、床板の修理、夏休みには瓦屋根修理など、また材料、道具も生徒持参で、「自分の学校だ」という信念のもとに教諭と一体となつて進めた。特に瓦修理には出入り瓦職人を自分持ちで雇った。現在の職員生徒には考えられない行為の多くが実施され、同先生は「勤労と勉学の意欲に燃えた生徒の姿」に感動したと述べている。

校舎は、昭和30年代のはじめ武道場が取り壊され、一九五九年、一九六五年の台風により一・二年教室と講堂(御大典記念建設)も修理不能なほどの大被害を受けた。しかし、関係者の新校舎建設の悲願も空しく統廃合への道を歩むのであった。



昭和31年11月 3年生(単学級)

(理科実験室は普通教室に水道を付け、左に見えるように排水はゴムホースと土管を先生自ら作る)

生徒の状況

近在各所の職場から入学希望者を含め、選考試験の上、七四名(女子16名)の二学級で発足した。生徒数が最高に達したのは一九五一年四月で、総数二三三名を数えた。

第一回卒業生は労働と卒業の両立が困難であったため、49名となったが、さらに大学に進学する者も15名を数えた。

生徒男女比率をみると、一九六〇年前後の入学生から女子の増加が顕著になっている。最後の募集となった一九六五年には男子を超えている。

そして一九六七年四月、埼玉県の分校統廃合施策により、所沢高校に三、四年生は委託され、開校21年を経て、18回の卒業生六七五名を輩出し、分校を閉じ

ることとなった。

働きながら学ぶという定時制生徒にとって休息は大切なことであつた。当時、結核は克服されておらず、過労のために発病するものもあり、分校では健康管理に注意を喚起した。先生方は疲労の見られる生徒にたえず言葉をかけ、無理ないように配慮された。

分校の授業と教師陣

所沢分校では、中心校のカリキュラムを範としながら、教師陣を核とした所沢独自の授業体系を組上げた。例えば、西洋史、東洋史が二、三年に連続し、解析ⅠのほかⅡが三、四年に連続し、理科は化学、生物に加えて三、四年に物理がおかれていた。芸能は図画のみ(五二年には書道がおかれた)で、女子の家庭科履修時には男子は幾何、英語、商業を選択履修した。とくに芸能は少なく英語が五時間各学年におかれた。

一九四八、五一年頃の担当された先生は次の通りである。

国語甲・小沢俊郎、国語乙、漢文・鈴木睦雄、新井弘達、国語・藤宮頼夫、一般社会・宮下貞雄、新井弘達、日本史・藤宮頼夫、新井弘達、西洋史・小沢郁郎、東洋史・栗原益男、解析Ⅰ、Ⅱ・辻功、図子岩雄、宮下貞雄、青柳芳夫、幾何・下田迪雄、化学・大野博孝、図子岩雄、生物・大国五郎、物理・石川正明、図画・大沢寛、保健体育・中里光男、藤宮頼夫、大国五郎、

英語RG・町野静雄、村田とみ子、山田泰司、栗原益男等の先生方であつた。

昭和三三年卒業写真(第八回) 教師陣・前列右二人目から、徳増学(国語・社会)、野田美好(理科)、木村市郎(英語)、新井弘達分校主任、片居木栄一(理科)、長沼非常勤講師の各先生方



昭和33年3月 卒業記念(第8回生)

(後ろが分校校舎(L字形)で、右の窓には板を打ち付け補強した所が見える。)

開校より15年を経て専任は若干増員となったが、専門性を重視した非常勤講師の配置が消滅し、結果的には教師の負担増と生徒へのしわ寄せが顕著になった。

非常勤講師の先生方は各々研究者をめざして勉強に励む姿が生徒に感動を与え、影響は大きかった。

分校の専任教師は主任以下五人で常時運営され、教師の欠勤などがあると試験の監督に事務員を動員していた。更に一週間

に三回の宿直に苦勞した。専任教師が休むと10日間宿直したこともあった。



昭和44年、閉校後の取り壊す直前の校舎

卒業生の回想

文化触発のルツボ

第1回 長沼 真澄

私は昭和23年入学、27年第1期で所沢分校を巣立った。数年後の院生時代、講師となって再び所沢分校に戻った。

学制改革で旧制併設中学三年卒の公務員となったが、定時制所沢分校が開設されるや、多様な背景をもつ同級生達と夜学ぶ機会が得られた。

年齢も中卒15歳は半数、残りとは従来の学制からはみだしていた社会人、最高は50代の看護婦長さんをはじめとする人生経験豊かな同級生たち。

専任こそ少なかったが、院生や専門家が講師となり、多くの川中OB講師も定時制の後輩のために情熱をそそいでくれた。断片的にだが当時の教室を思

い出してみると、数学専攻の院生講師が解法そっちのけで、先端の研究にも触れつつ、数学的なものの見方を説いてくれた。国漢担当の分校主任は、漢詩の平仄や中国語の韻での朗誦があった。詩人肌のOB講師は近代詩の鑑賞を情熱的に取り上げてくれた。今でも李太郎の詩が響く。

英語では、市内在住の英文学者による英米文化、英語のなりたち、印欧語のなかでの英語の成立、日本文法と異なる文法システムを教えてもらった。先生が大学に戻ると、ネイティブに近い発音の先生が他の分校から応援に来てくれた。

二代目の分校主任は、台湾守備隊の将校だった僧侶で、日本史の裏話も教えてくれた。

世界史では海運船舶史専攻のOBから古代ギリシャの海戦やらフランス革命史を、後にスポ



当時の先生方 右から、石川正明、鈴木睦雄、新井弘達、栗原益男、辻功、大国五郎の各先生方

ーツ文化論の専門家となった講師からはスポーツの楽しさを味わう文化的意味と、なんとドイツ語の初歩を、川中野球部OBの講師からは音楽鑑賞に身心をゆさぶられるのも体育であるというプラトンを学んだ。

冬ストープを囲み、米軍放出の食糧を分け合った場には、川中OBが来てくれ、「三ツ星や学を好まぬ夜学生」(後に医師になった同級生の句)と励ましてくれた。

川越高校定時制所沢分校は、文化触発、次への飛躍を用意する文化拠点、文化装置と成っていた。

60年前の思い出

第5回 長沼 秀世

私が定時制に入学したのは1952年だったが、それは我が国が独立を回復した年だった。経済的にも戦後復興が終わり、

高度成長へ向かおうという時代だった。しかし、日本はまだ貧しく、高校進学率は5割弱に過ぎなかった。その一部が、勤労

学生として定時制に進学したわけである。私の所沢分校はわずか1クラスだが、学生の出席率は良かったように記憶している。

当時の先生方には、東京教育大学(筑波大学の前身)の大学院生とか研究生の方が複数おり、私の1年担任の辻先生もその一人だったと思うが、後に大学教授になられたようである。先生には「一般社会」と「解析I」

を教えていただいたが、当時の雰囲気の中で私もいっぱしの政治論をぶち、先生と再軍備の可否について議論したような気がする。

その他にも記憶に残っている先生方は、やはり大学教授になった栗原先生、後に画家になられた徳増先生、お名前を思い出せないが戦争のため片腕を失った英語の先生、主任であり所沢市内のお寺の住職でもあった新井先生などである。

また夜学生で良く時間があつたと思うが、クラブ活動も結構盛んで私は図書部と文芸部に属し、神田へ古本を買いだしに行ったり、拙い詩を書いて部の雑誌にのせたものである。

弁論大会も行われ、私はある演説に「逆コース」と野次をいれて「野次賞」をもらったことも微かに思い出すことである。

川高所沢分校で学んで

第5回 木下 宏

戦後教育の機会均等が与えられ、昼間働き夜学ぶ者にも道が開かれた。昭和23年に寿地区にあった元商業高校跡地に開校しました。私が中学三年生の時でした。所沢中学の校舎も現在の明峰小の所に建設中でした。その為昼は我々が、夜は定時制高校の生徒と一年八ヶ月同居していました。

当時の私の担任の先生方から常に定時制高校の生徒をお手本にしなさいと教えられました。

勉強に対しての熱意が全然違っておりました。当時市会議員の先生方が私の家によく立寄り、お茶を飲みながら「木下の倅、この問題を解いてごらん。十二角六角は嫌だよ、八角でいこう」私には解けませんでしたが。解答は「無学は嫌だよ、夜学でいこう」でした。自衛隊の入隊試験に三人しかいない解答でしたとの話の記憶が思い浮かびます。

私も家計を助けるため、又、家から学校が近いこともあり家の仕事はきちんと手伝うという条件で4年間通学しました。

仕事がとても忙しかったので17時30分始業時間ギリギリに教室に駆け込むような毎日、先生には「遅刻の王様」なんて言われていました。

二年生の時、バスケット部の先輩からセンターに大きい人が欲しいだ、お前背が高いし体も大きいから丁度いいと言われ入部しました。私は一年遅れて始め多分取り戻そうと10分の休み時間を利用して練習し、授業が9時に終わると一時間校庭の二つの大きな照明の下で練習に励みました。練習の成果が実り、練習試合に二回所高に勝つことが出来、自信ができました。県大会では優勝こそ出来なかったけれど三位になったことは良い思い出です。練習があつた日の翌日には朝起きるのが辛かったですね。あの頃風邪も引かず、よく体が続いたと思います。若さでしょうね、卒業できた時はホットしました。

各OB会・同期会の活動

待たれる米寿同窓会

宮崎 雅好(中42)

私達は昭和14年、伝統ある川越中学校最後の甲乙丙3クラス、学科試験、口頭試問等受験者342名中から選ばれた150名が入学許可された。軍事訓練は厳しかったが、勤労奉仕も少なく充実した教育と部活による人間育成の薫陶は大変有難く皆さんが感謝しています。

然し太平洋戦争は熾烈となり最上級5年生の昭和18年10月には明治神宮外苑広場で行われた雨中の出陣学徒壮行会は学問中途で出征、そして徴兵年齢引き下げと大学生だけでなく、私達の前途を決した忘れられない年でした。

その翌月には埼玉県下中等学校・青年学校合同演習に完全武装で参加、19日民泊、20日県立忍高等女学校校庭に集合し、南軍として「のぼの城下」で北軍と合戦、後退し越辺川近くの農家の稲藁の中で仮眠、21日払暁戦の後、陸軍航空士官学校坂戸飛行場(現筑波大付属坂戸高校)に集結、演習終了には朝香の宮の御前で分列行進、埼玉県下青少年の進路が示された。

その後19年3月卒業、進路は別れたが大正生まれは最後の徴兵検査の後出征、20年8月終戦となり陸海軍の学校在学者も教育中で第一戦に臨まず戦死者も殆ど無く、戦後の日本復興の若き力として今日の日本を後輩に残すことが出来た。

平成24年に開かれた川越中学第42回生の42×2＝84歳を無事に越えた(御堂)同窓会の85歳記念会場に光景の一瞬にこんな事がありました。

「急に欠席で申し訳ない」都



市対抗野球の豊岡物産、富士鉄室蘭で活躍した金子高祈君は現在釜石の自治会役員として、東日本大震災復興の緊急会議に出席のため電話で欠席の通知、隣に居た元焼津水産高校長で静岡県高野連理事長の栗原秀夫君に受話器を渡す。話は続く、誰しも久し振りの同窓会に話は尽きない。

物故者も多く、同伴者も含めて23名が楽しく思い出を語り、次は米寿の会を計画しようと決定しました。

来年は二〇一四年私達の入学75周年、卒業70周年、米寿を迎える大正生まれの方は88歳を初雁城趾の大楠と大正天皇行在所の地を目で見、足を運ぶ良い機会になる様計画したいので、宜しくお願いします。

同窓会には本校同窓会医師会会長関根先生、副会長齋藤達先生もお出かけ下さってご指導をお願いします。

三期生・まだまだ傘寿

青柳 安彦(高3)

前号で高校2期の先輩方の傘寿の記事を拝見しました。…と言うことは当然、今回は私達、高校3期の傘寿です。

昭和26年の卒業生名簿、217名をベースに、途中転出入を加えて288名の消息を把握し



たのが平成6年。還暦文集「おいしい 楠の木よ」を上梓した年です。

この文集の完成記念同窓会は平成6年2月、川越の東武ホテルで行われ、前夜の雪が凍る中、130人の出席で賑わいました。傘寿の同窓会はあれから18年、平成24年10月25日、同じ東武ホテルで行われましたが、出席者は64人。全盛期の約半数になってしまいました。

18年で約半数を、多いと見るか、少ないと見るかは見方にもよりますが、名簿(11月1日現在)の上ではまだ161名の健在が確認されており、現役多忙、家庭事情などによる欠席もある

ことから、まだまだ傘寿。元氣一杯の同期生と言っても良さそうです。

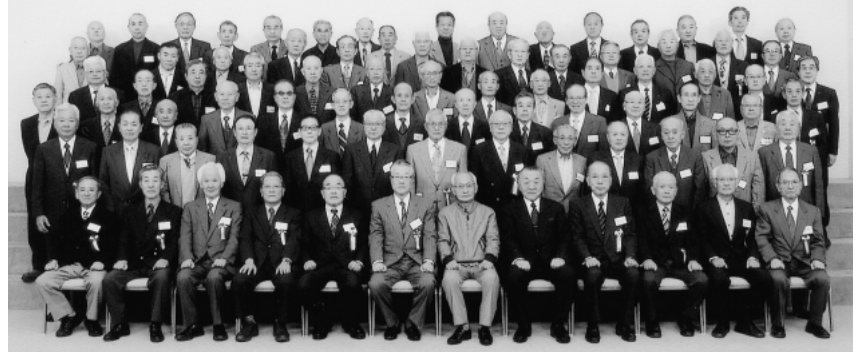
私達三期の大きな特徴は敗戦の年に入学し、一応の軍事教育を受けた、最後の戦時型中学生であること…と言っても2期の先輩方のような本格的なものではなく、防空壕掘り、農作業でそれも肝心の芋掘りのシーズン前に敗戦となっていました。

もう一つの特徴は学制改革の狭間を潜り抜け、同じ校舎で、同じ仲間と中学、高校の6年間を過ごしたことでしょう。このため同期生同士の絆も強く、同期会の結束も固いことです。

ゴルフ、旅行、俳句、碁将棋などは、どの同期の方もやっておられるでしょうが、私達は、同期全体の分科会と捉え、年2回の会報「おいしい、楠の木よ」で情報を交換し、結果を発表しながらやっています。負けてばかりいる野球部の応援に押しかけたり、年2回、校門の前に集まって写真を撮ったり、会報を通じて3期全体の分科会としてやっているわけです。その会報も20号、続いて卒業60周年記念号を迎え、これを記念してバックナンバーに記念サプリメントをつけて合本とし、本校の図書室、同窓会に献本させて頂きました。

おついでに折に、是非お立ち寄りの上、ご高覧ください。

第9回 高六会同窓会 喜寿を祝う会



高六会「喜寿の祝い」

大河原 光行(高6)

平成二十四年三月十四日第九回同窓会「喜寿の祝い」を川越プリンスホテルで開催。八十三名の参加があり、春の宵を楽しんだ。一昨年の秋、急に数え年でという声があり、急遽準備開始。

昭和二十六年春、朝鮮動乱の最中、初めて白線帽をかぶった私達は昔の寄宿舎だった校舎で授業開始、秋からは校舎改築工

事で、武徳殿(現本丸御殿)の薄暗い裸電球のものとでの授業。翌年、対日講和条約締結だが修学旅行も遠征もお米持参の時代。野球部のグラウンドでは陸上競技、サッカーなどなんとか住み分けていた。

同窓会当日は恩師大川明治先生、渋谷健先生にご出席いただき、お元氣な姿に我々が元氣をいただいた。かつて高度成長時代、産業戦士として、高六会の

会員は世界を股にかけ勇躍していた。現在、埼玉県内だけでも各種団体の責任者や実業の最前線にいる人達も多く、米穀、洋品、金属、眼鏡、カメラ、酒屋、スーパー等の経営者も健在。

岡山から駆け付けた木村昭夫君を始め、新しい教育方針で脚光を浴びた剣道の達人の挨拶、大学での英語教育や金属工業の根源の話、川越、飯能、所沢、川島、日高等各地区での活動や地域の話題の披露。永年、国政、県政、に尽くした国会議員、大

使、検事、公務員等で叙勲された人達の紹介があった。

あとはただ、ひたすら雑談、これが肝要、何かの特別な話題でなく次第に大きな話の花が咲き、二次会への誘いとなった。閉会近く、今回で最後だ、などという声もあったが、「傘寿の祝い」ということで再会を約束した。また、最後の十人になってもこの会を続けたいという、心強い便りも寄せられている。

高21回生第2回同窓会

有山 博(高21)

前回、卒後40年の集いを行った



右から、小高秀一、金井昭夫、中西章、宇波彰、萩原英雄の各先生方

てから間もなく4年、そろそろまたやろうぜと言いつつ集まり幹事会が動き出し、飲み会を兼ねながら企画を進め、12月8日、川越プリンスホテルで第2回同窓会を開きました。

クラス担任だった宇波彰先生(英語)、金井昭夫先生(数学)、中西章先生(化学)の他に音楽の小高秀一先生、体育の萩原英雄先生もお招きして、同期生126名が集いました。

受付を終えるとすぐあちこちで話の輪ができます。先生方のご挨拶の後、同期生から坂戸市長石川清君、川越市長川合善明君がそれぞれ一期目の市長体験を報告しました。

二時間半の歓談の時はあっという間に過ぎて、15時半に散会しました。話足りない者たちは、元鏡山酒造の敷地を川越市が取得して再生させたイベントスポット「蔵里(くらり)」へ向かいました。

三十路だヨ、全員集合

竹下 公一郎(高52)

川越高校校歌2番には、次の

三十路だヨ 全員集合!

県立川越高校
2000年卒業生同窓会のご案内

2000年卒業生全員が30歳となる節目の季節に、右記のとおり同窓会を開催する運びとなりました。
当日は母校にて、高校時代を思い出し、仲間と交流の機会を企画しております。皆様お集まりください。お申し込みをお願いします。

準備の都合上1月15日までに、いずれの方法で出欠をご連絡ください。
1. 本返信はがき
2. 下記メールアドレスへの返信(出欠、氏名、TELを記入)
kawagochohigh-2012@googlegroups.com
3. ウェブサイトからの申し込み(バーコードからも可)
https://ssl.form-mailer.jp/fms/69f99b277847

歌詞がある。「切偲の友誼」

本会報を読む愛校心あふれる貴兄に限っては、意味はご存じだと思いが、念のために解説しておくと、「切磋琢磨し互いを高め合う友情」という意味だ。

幹事を務めた同窓会で、改めて川高の友情をみることとなった。2012年3月、川越高校校舎にて「三十路だヨ、全員集合」と題し、第52期同窓会が行われた。小雨が降り肌寒い中、駅から徒歩20分という好立地にも関わらず同期生87名と恩師6名に参加していただいた。

同窓会開始になると学校のチャイムが流れ、センター試験から抜粋した学力テストの問題が全員に配られる。普通の同窓会を想像していた参加者は突然の試験に明らかに困惑していた。

学力テストはチーム分けで、参加者を点数別にAランクからEランクまで分けていく。チーム対抗で腕相撲対決をしたり、1500M走の是非を問うディベ

トしたりと、企画はテンポよく進んでいった。

最後の企画は校歌の合唱である。全員起立し、学ランを着た第39代石川応援団長の威勢のいい口上が始まる。久し振りの光景に参加者の高揚感が伝わってくる。重厚な楽器の音から前奏が始まり、自然とタイミングを合わせて参加者が歌い始める。

読者の皆様は、小・中・大学の校歌を覚えていたのだろうか？酒が入っていない状態で思いつき切りその校歌を歌えるだろうか？普通校歌を大声で歌えば無理しているなどと冷やかな視線を受けるのがオチだ。しかし本同窓会では参加者が一斉に歌い始めた。大合唱の録画を見ると、30歳の男90名が校歌を歌う姿は部外者から見れば異様であるが、そこには3年間で培った自信と互いへの信頼感があつた。また40歳で集まり合唱するのが今から楽しみだ。

十五周年嵐山初雁会

会長 山岸 忠雄(高15)

平成二十四年七月八日、嵐山初雁会創立十五周年記念総会を開きました。新たに、田中亮氏(高47)、関根盛敏氏(高48)、尾針雄介氏(高43)の若手も加入、本校同窓会事務局長の岡部恒雄氏(高15・小生の同期、同級生)を交え、楽しく賑やかな

会となりました。



会の事業として、秋の行楽は、三年振りに再度長野県に行き、時々小雨に降られましたが、ワインや味噌の工場見学と試飲、味見、松茸料理などを堪能した。塩田平を走るローカル線に乗り、車掌さんが吹くハーモニカに合わせて歌を歌いました。最後はリング狩りで参加者一同日帰りの旅を満喫しました。新年会は恒例で、平成二十五年二月十一日に行いました。

創立60周年・在京初雁会

大館 廣(高21)

在京初雁会が結成されてから

この3月に還暦を迎えた。

この前身は大正時代に遡る。卒業生のなかで東京地域に勤務又は上級学校の在学する者が年を逐って増加するに伴い、東京川中同窓会を作ろうという機運が初期卒業生の先輩方の間に高まり、大正12年、上野「精養軒」で華々しく旗揚げされた。

年2回程度開催されていたが、太平洋戦争後の戦局が次第に激しさを加えるにいたり、遂に目黒の雅叙園の会を最期に自然消滅の形となった。

それから敗戦後の混乱窮乏時期を切り抜け、東京川中同窓会に参加していた菅間六郎氏(中17)、朝海倭夫氏(中21)の間で復活の話が起り、斎藤憲吉氏(中11・ピルゼン経営)、坂田圭司氏(中17)、内田静馬氏(中22)、高橋三四次氏(中23)が加わり、昭和28年3月18日、銀座交詢社内「ピルゼン」で発足した。

以来、歴代の会長のもと、ここに60年を迎えたのである。

初代 矢部謙次郎氏(中1)

二代 喜多 義之氏(中6)

三代 児玉 政介氏(中7)

四代 坂田 圭司氏(中17)

五代 矢部 義一氏(中23)

六代 増島 隆二氏(中35)

七代 田中 隆氏(中45)

八代 高島 敬忠氏(高10)

当初は、月例会を8日正午より「ピルゼン」で開催し、これ

が四十余年続き、マスコミにも話題になったことがある。

会員は関東一円から幅広く参加されており、現会員数は75名である。

最近では、春の花見散策会、五月の総会、秋の講演会の開催が主なもので、母校の総会、秋季散策会には毎回多数の方が参加している。

会の運営も家族などが気楽に参加できるようにし、「婦人部」も出来、女子会と称し、秘かに開催されている。

ここ最近の講演者は、

田中隆氏(中45)、岡部恒雄氏(高15)、大野惣平氏(高15)、板谷敏弘氏(高32)、横溝高至氏(高21)、神部勉氏(高10)、渋谷健氏(中47)、宮根七郎氏・内沼稔氏(高12)、宮岡成次(高6)、入子助藏氏(高8)が熱弁を奮った。

また、50周年記念に江戸東京をテーマに母校同窓会の秋季散策会を主催することとなり、平成8年 増上寺周辺



在京初雁会会報・題字(画・内田静馬氏)



(昨年、岩崎邸〜東大赤門へ)

平成13年 江戸城周辺
平成20年 浜離宮・浅草
平成22年 深川・清澄庭園
そして、今回は別にご案内のように、水上から新しい東京の名所を見つめるという企画である。
昭和48年4月、当会の会報「鐘つき堂」を発刊し、年2回発行して、現在、92号にまで至っている。

第十二回「川高くすの木 俳句大会」のご案内

柴崎 育久(中48)

同窓会の公式行事である本大会は、末尾記載のとおり本年も開催いたします。奮ってご参加下さい。

当日はご出席の方だけで句会も催し、当季雑詠三句を投句、沢山の小品も用意されます。

乞、ご期待のほどを。

月例「くすの木句会」は毎月第一土曜日午後一時より川高同窓会会議室で開催して居り、毎回、松本旭大先輩(中35)と本阿弥書店社長の本阿弥秀雄氏(高18)の選と添削を頂いて居ります。

又、懇親と研鑽を兼ねて年一度一泊旅行会を行って居り、すでに蓼科高原、日光霧降高原、川治温泉、足尾銅山等を訪ねて皆さん傑作をものにして居ります。

なお、末尾記載の「在校生の部」の選者は前記紹介の松本旭先生、本阿弥秀雄先生、川高校長松下幸夫先生、川高同窓会会長田中正と私の五名で、僅かな図書券ですが、校長先生手づから授与されて居り、その費用は同窓会より援助されて居ります。

「川高俳句」の歴史は古いも

ので、戦後、佐藤徳四郎先生が指導され、昭和20年秋校内に小句会が誕生。21年初夏、喜多院で大会があり昨年逝去された元飯能市長の小山誠三氏(当時川中三年生)が特選に輝いた一句を思い出します。

鷺飛んで若葉隠れの五輪塔

故 小山誠三(中47)

●ご案内

日時 8月31日(土)

受付正午より

午後一時～五時

当日句有り

会場 川高図書館2階同窓会室

投句 夏・秋季雑詠三句(郵便

葉書に楷書で記述)

投句先 〒350-0045

川越市南通町15-16

佐々木 新

投句締切 7月31日(木)消印有効

会費 投句三句に付一〇〇円

を郵便小為替で。在校生

は無料

●第十一回俳句大会作品集より

俳句大会は、母校の関係者教

職員、生徒の保護者、卒業生の

連れ添いの方等)に幅広く呼び

かけ、今回は43名が参加されま

した。

紙幅の関係から卒業生、在校

生の作品を掲載させて頂きます

汝が胸に青さ点して初螢

松本 旭(中35)

蔵壁の家紋古びし秋ざくら

村田のぼる(中41)

一葉居ありし裏町釣忍

木村 麗水(中42)

蔵街や打水かはす江戸仕草

佐々木 新(中48)

音に籠る魚板の鱈や安居寺

柴崎甲武信(中48)

炭鉾節これなら出来るぞ盆踊り

相田 句(高3)

稲妻や赤城の裾をシヨアアップ

五十嵐 甫(高3)

河骨の笑みかける池雨もよひ

江原 襄(高3)

小流れの背戸より十歩花菖蒲

齋藤 弘行(高3)

葎切や水漬く岸辺に風の径

宮崎 敏昭(高3)

客人の折り目正しき秋簾

山崎 香侑(高3)

紫陽花の濡れてそまりぬ三波石

中村夢扉夫(高11)

秋入日逆光に勃つ乳房かな

横山 正樹(高13)

如何なる名どろぼう橋や木下閣

岡部つねを(高15)

切幣や茅の輪を括る石鳥居

遠藤 俊彦(高17)

作業着で潜る日暮の茅の輪かな

小林 幸二(高17)

白靴が心をどらせ切符買ふ

関口 高栄(高17)

走る子に若き日想ふ夏やつれ

栗原忠梨風(高20)

かき氷掬ひて思ふきのこ雲

勝浦 敏幸(高21)

甚平や脛に地の風天の風

市川 英一(高23)

注ぐほど冷酒華やぐ青切子

前島 敏生(高23)

塩茹での玉蜀黍に亡母の顔

小島 正喜(教員)

「在校生の部」

(天賞)

夕立の後に飛び交うフリスビー

高村 陸(1G)

(地賞)

透き通る君の瞳とソーダ水

並木 淳(1J)

(入賞)

君と会ひ青い稲妻胸に落つ

松田 遼平(1D)

(秀逸賞)

駅前で団扇もらいに遠回り

今野 雅史(2E)

短夜の花咲く音に筆止まる

宇佐見 徹(1B)

アブラゼミ洗濯物にまぎれこむ

杉田 太一(1D)

遠くまで連れていってくれ鯛雲

ヒューキンス洋平(1G)

袖濡らし金魚をすくう君がいる

鈴木 海登(1I)

夏の夜トトロいるかなあの森に

太田 陽介(1I)

くすの木のかなた夕焼日がある

川合 恭明(1I)

植樹料納入御礼とお願い

「川高初雁の森」の植樹料につきましては、平成24年度は各地区初雁会、同期同窓会などの連絡網を通じてお願いしてまいりました。

その結果、288名、4団体より総額2,164,743円納入して頂きました。年度途中のお願いでありましたが、多くの方に納入して頂き有難うございました。

平成25年度は、この同窓会報に添えて植樹料納入のお願いしております。

一口、二千元以上です。

なお、既に納入されている方にもご案内をさし上げておりますが、上限はありませんのでよろしくお願いいたします。

終身会費納入の御礼

平成24年度の納入者は、1,322人、総額6,511,760円納入した頂きました。ありがとうございます。過年度分も含めまして、5,015人です。しかし、まだ、会員総数の20%です。

なお一層、まだお納め頂いてない皆様のご協力をお願いいたします。

川越市の鳥 カリ

佐久間勇次(中38回)

国の鳥はニホンキジ、埼玉県の鳥はシラコバト、川越市の鳥はカリである。川越のお城は川越城で、お城にちなんでカリとした。ガンとはいわない。鳥類分類学では、いろいろな雁をガンといっている。カリとはいわない。宮城県の鳥は雁。北海道美唄市、新潟県豊栄市、宮城県栗原市の鳥は雁である。いつの日か、川越と四市で雁のサミットを開催してみたい。

初雁城、名前の由来

雁は冬の渡り鳥である。北極圏の遠いシベリアから、初冬の頃に日本に渡ってくる。越冬して翌年の三月、彼岸すぎに四千キロも遠いシベリアに帰ってゆく。春を迎えたシベリアのツンドラ地帯で、産卵し育雛する。秋までに雛は親鳥と同じような大きさに急成長して、親鳥たちと日本に渡ってくる。雁は江戸時代には、南限の関東平野まで渡ってきた。上野の忍ばずの沼に雁が飛来してきた絵がある。川越でも藩おおかえ絵師、橋本雅邦が雁の絵を書いている。その掛軸が山崎美術館にある。雁は初冬の夕暮れに川越城の上空をカハハーンと鳴いて三回飛び廻って、いずこかに飛び去っていったという故事から、初雁城と名づけられた。

雁は美しい!

日本に飛来する雁は、中型のマガンとヒシキイガン、小型のカリガネなどである。中国大陸には、中型のサカツラガンが渡ってくる。中国の人々は、この雁をとらえて、長い長い年月を

かけて家禽にした。鶩鳥である。また、マガモを飼いならしたのがアヒルであり、猪を飼いならしたのが豚である。鶩鳥は欧州にも輸出された。雁は長距離を飛翔するので沢山の栄養を肝臓に貯える性質がある。鶩鳥を強制給餌して肥育し、肝臓を極度に肥大させたのが、世界の三大珍味の一つ、フォアグラである。雁、鴨、鶩、鶴などの水鳥の足はいくら冷たくなっても凍傷にならない。それは足にはワンドーネットといわれる特別な血液循環のしかけがあつて足を温めるからである。私は禁猟になる前の昭和三十年代の始め頃、仙台にいた。知人が猟銃で雁をとったので、雁の肉を買った。マガモと同じような赤肉で、マガモのような旨い肉であつた。昔、江戸時代に武芸として、お鷹狩が行われた。オオタカを訓練して、ケモノ、トリなどをとらえた。オオタカより大きい雁は最高の獲物であつた。お殿様も家来たちも雁は旨いと賞味した。しかし、町民は旨いという雁を賞味することはできなかった。それで、豆腐屋さんが、雁に似ている旨い豆腐といて、ガンモドキを売り出した。雁の肉には似てない豆腐をガンモドキとして売り出して大当たりした。今でも、ガンモドキは各地で売られている。

宮城の伊豆沼へ雁見学

川越の皆さんは、市の鳥は、カリであることは知っていても、カリを見たことがない。それで私が仙台にいた頃、宮城県の北雁の南限である伊豆沼に出かけて何度も伊豆沼の雁を見ていた。それで川越の皆さんを伊豆沼

雁の剥製を譲り受ける

の雁を見ていた。だと、初冬の十一月下旬に一泊二日の日程で出かけた。十数名の皆さんと東北新幹線に乗った。栗駒高原駅で下車すると駅の上空を雁が舞っていた。まだ寒くはない良晴れた日であつた。雁は昼間は遠いあちこちの田んぼで落ち穂などをついばんでいる。夕方になると、十羽、二十羽の家族のむれが、詩歌にうたわれるように、棹になり、鍵になって低空を飛んで沼に戻ってくる雁の姿を存分に見ることができた。翌日は早朝、日の出前に数万羽が一斉に風上に向かって飛び上って、各地に飛んでゆく大群の雁の姿を見ることができた。また、鴨は夕方に沼を飛び出して各地で餌ばみして朝かえりする。昼の沼には、沢山の鴨たちと白鳥たちがいて身近に見ることができた。皆さんは、夕方の雁、昼の田んぼで餌ばみする雁、早朝に一斉に飛び立つ雁、昼の沼でたくさんいる鴨と白鳥などを見物することができたと大喜びで川越に帰った。そして雁の剥製を市役所に飾りたいと申し出があつた。



しかし、雁は国の天然記念物になり捕獲は禁止されていた。剥製を作ることは出来なかった。

朱鷺の剥製

しかし昭和三十年代の禁猟になる前の古い剥製があるかも知れないと思つた。それで私が東北大学時代の教え子で現地に在住して大物になっている有力者に頼んでみた。そして、譲つても良いと言う古い剥製が三羽見つかつた。現地の人々は生きた雁を常々、身近かに見ているので川越市の鳥ならばと快く譲つて下さつた。一羽は川越市役所に飾り、あとの二羽は校章のルーツになっている川越高校と川越女子高の同窓会室に飾つた。現地の人々に有難く感謝している。その他、雁にちなんで校章、校歌がある小・中学校からも、是非にと要望があつたが、もう手に入れることはできなかった。



川高同窓会室の入り口に雁と並んでトキの剥製が飾つてある。このトキの剥製は、私が川越中学校の生徒の頃、物理学の教師でアダナはトンカチと云う橋本先生が、教材としていろいろなケモノ、トリの標本を集められた。七十年前の標本が、新設された標本室にあつた。その中にトキの剥製があつた。うすよごれきたない標本だったが、くちばし、体型からトキだと判断して校長先生のお許しを頂いて借り出した。剥製作りの名人

といわれるおじいさんに頼み、標本は生まれ変わったような見事なトキになった。

終戦後の新しい教育制度で作られた初雁中学校がある。その同窓会長から雁の絵を飾りたいとのことで川越高校の美術の先生に描いて貰うことにした。美術学校出身で生まれは青森県八戸市。幼少の頃から、冬に、春にわたってくる雁を見てきた久保是多先生である。

絵は冬空に落ち穂をついばむ十数羽のマガンの生き生きとした姿を描いたものである。たまたみ二枚位の大きな日本画の大作である。雁の絵として最高の傑作だといえよう絵はしばらく初雁中学校に飾つてあつたが、現在市美術館に保管されている。この雁の大作の絵を市民の皆様に常時、お見せできないかと思う。常時、公開できないけれども、原寸大の大きな写真にしてでも、いきいきとした雁の姿をお見せできないかと思う。

川越には、初雁の名前の会社がたくさんある。初雁橋、雁見橋などもある。これらの会社の有志の人々から御後援を頂いて、伊佐沼の片隅に横に網をはって囲いを作り、主翼を切つて飛べなくした生きているマガン、カリを市民のみなさまにお見せできるようにしたいと思つている。(日本大学名誉教授、元川越市教育委員長) 平成二十二年五月

記
この投稿は、平成22年5月にいただいたのですが、編集の都合で掲載できなかったものです。

佐久間さんは、平成24年お亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます。

母校だより (二)

更に大きな飛躍

川越高校スーパーサイエンス
ハイスクール

SSH企画部 阿部 宏

今年度の成果

● 県知事賞受賞と全国大会出場
埼玉県科学教育振興展覧会で
物理部/SSHの「イオンクラ
フトの浮上力」がトップの県知
事賞を受賞、日本学生科学賞
中央審査(全国)に進みました。



県知事賞

● 全国大会佳作

十月に行われた日本科学技術
チャレンジ(JSEC)で物理
部/SSHの佐藤伸一郎君によ
る「宇宙シミュレーション」が
全国約二百作品中上位二十五%
以内に入り佳作を受賞しました。

● 全国大会出場

地学部の中中優介君が第一次
選抜を突破し、三月に行われた
第四回日本地学オリンピックに
出場しました

● 全国大会出場決定

第五回日本地学オリンピック

一次選抜で、一年生菊池駿太君
が二次選抜(全国大会)出場を
決めました。

● 四割の生徒が、SSHが本校
志望の理由の一つと回答。

● 一年生研究グループ過去最高
SSH基礎I研究グループの
選択者が過去最高の百七十名と
なり、SSHに関わる生徒の裾
野がさらに広がりました。

● 八割の生徒がSSH事業で科
学への興味が高まったと回答。

● 研究規模拡大。全学年約三百
名の生徒が研究活動を行い、二
月の生徒研究発表会で、新たに
加わった数学分野も含め四十一
作品の発表で研究能力を高めた。

● 科学ネットワーク拡大

理科研究指定校・川越市立第
一小学校と通年連携し、自由課
題助言会、川高理科施設見学・
科学教室、第一小理科研究授業
に川高生がティーチングアシス
タントで参加、第一小の先生と
川高教員との実験研修会、川高
教員による第一小科学クラブ活
動を実施、川越市教育委員会と
の連携では市内小中学校の先生
と川高教員との理科実験研修会
が行われ、地域の小・中学校と
川高が科学で深く繋がりました。

● 過去最高千三百名参加「冬休 み科学教室」

十二月二十二日
川越市内の小中学生と保護者千
四十四名が川越高校に来校、川
高、川女、川南の合計二百四十
八名の生徒が先生役として科学

の楽しさを様々な実験や工作で
伝えました。

SSH事業の目的

「将来の国際的な科学技術系
人材育成」のための先進的な理
数教育カリキュラムの開発が目
的。本校は昨年度二期目の
指定を受け、今年度で七年目に
なります。高校としては破格の
年一千万円レベルの研究資金の
支援を受けます。「意欲のある
生徒の能力を伸ばす」「出る杭
を更に出す」がSSHのモット
ーです。

本校SSHのテーマは新指定
から二つ設定しました。一つめ
は「知の融合」です。趣旨は、
人文・社会・自然科学、すべて
に渡る広い視野を持って、分野
横断的・融合的な新しい学問を
創造しうる人材を育てるという
ものです。二つめは「知の継承
—科学ネットワークの水平展開
と垂直展開—」です。趣旨は、
一期目で培ったSSHのノウハウ
を高校間・小中高大企業・県・
国と共有しようというものです。
本校SSHの特徴は文理の進
路に関係なく全生徒に科学リテ
ラシー教育とプレゼン能力育成
を行うこと、全てのSSH講座
を全員対象としていることです。
現代社会は科学技術なしで生
きて行くのは不可能です。科学
の最先端ではどんな研究が行わ
れ、それが科学技術としてどう
社会で使われていくべきか。全

員が科学を教養として身につけ
ることが本校SSHの目的です。

主なSSH事業

● 全校講演会

「アウの時間・ネズミの時間・
私の時間」というテーマで、東
京工業大学教授 本川達雄先生
にご講演いただきました。内容
は大きい動物の時間より小さい
動物の時間の流れ方が早いこと、
関連してエネルギー消費の大き
い現代人の生き方は時間の流れ
が速く生物的な時間感覚とのギ
ャップが生きづらさを生み出し
ていると分析。エネルギーを大
量消費する現代社会に対する警
鐘を鳴らすご講演でした。

● SSHハワイ島実習

本校SSHのリーダーを育て
る中核事業です。今年も八月下
旬に五泊六日、生徒八名で実施
しました。目的は最先端科学に
触れ科学への志を高める、フィ
ールドワークと後の研究で研究
能力を高める、実習をすべて英
語で行い国際性を高めることで
す。テーマは三つ。「宇宙誕生」
では世界に誇るすばる望遠鏡山
麓施設での研究者とのワークシ
ョップ、四千二百mのマウナケ
ア山登頂と天体観測、「地球誕
生」「生命誕生」では、ハワイ
大学の火山学者、生物学者によ
るキラウエア火山でのフィール
ドワークで、大地が生まれる現
場に立ち会い、生まれたての大
地に芽生える生命の力を学びま

した。

これまでの実習者から、地学
オリンピック世界大会銀メダル
2名、物理コンテスト全国大会
金メダル一名、銀メダル二名と
世界、全国トップの成果があが
りました。ハワイ島実習は意欲
のある生徒の志に火をつけ、自
分の殻を壊し、進み続ける力を
つけ、彼らの研究能力を飛躍的
に伸ばしています。

● 卒業生との連携

本校SSH事業に関わったO
Bにより、OBネットワークが
立ち上げられ、科学展や研究発
表会での研究指導・発表指導で
本校と連携しています。異なる
研究分野のOB同士の交流も目
的です。同窓会によるSSH事
業への財政支援により活動がで
きており、感謝いたします。

今年度のまとめ

今年も全学年の生徒達がSSH
H事業で志を高め、粘り強く取
り組む力をつけ、結果を出しま
した。SSH事業で意欲のある
生徒達がまとまり、高校の枠を
超え、やりたいことを徹底的に
できる場ができたということが、
成果の理由としてあげられると
思います。卒業後も、あるいは
入学前から川高を核とする科学
のつながりができつつあります。
SSH事業への同窓会のご支
援に深く御礼申し上げます。
今後ともよろしく願います。

2013年度 大学等入試合格状況一覧

母校だより

(三)

国立

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
北海道大	3	3	1	1
弘前大	1	1		
東北大	16	16	5	5
筑波大	6	6	2	2
宇都宮大			2	2
群馬大			1	1
埼玉大	9	7	4	4
千葉大	5	3	1	1
東京海洋大			1	1
東京大	2	2	2	2
東京外大	1	1		
東京学芸大	5	5		
東京芸大	2	1		
東京工業大	5	5	1	1
東京農工大	14	13	1	1
一橋大	5	5	3	3
横浜国立大	1		3	3
新潟大	3	3		
金沢大	1	1		
山梨大	2	2		
静岡大	1	1		
名古屋工大	1	1		
三重大			1	1
京都大	1	1	1	1
大阪大	1	1	1	1
神戸大			1	1
九州大	1	1		
宮崎大	1	1		
計	87	81	31	31

公立

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
首都大	3	1	4	2
横浜大	1	1		
大阪大	1	1		
神戸大			1	1

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
札幌学院大			3	
計	5	3	8	3

私立

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
獨協医大	1	1		
城西大	1		1	1
獨協大			2	
日本工大	1			
文教大	9	1	4	1
文京学院大	1			
日本薬大			1	
千葉工大			1	
秀明大			1	1
青山学院大	8	1	5	
桜美林大	2			
学習院大	10	2	6	1
北里大	6		2	1
杏林大	2	1		
慶応大	18	7	10	2
工学院大	1		4	
国学院大	1		1	
国際基督教大	3	2		
国士舘大	2		1	
駒澤大	6	1	2	
芝浦工大	13	2	21	3
順天堂大			2	1
上智大	23	8	9	3
成蹊大	3		4	
成城大	2		3	1
聖路加看護大	1			
専修大	2		1	1
大東文化大	1		2	
拓殖大			1	1
玉川大	1		2	
中央大	34	6	24	8

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
帝京大	1			
東海大	1		2	
東京経大	1			
東京工大	2	1		
東京慈恵会医大	1	1	1	
東京電機大	4		8	3
東京農大	7		7	2
東京薬大	1		1	
東京理大	37	10	33	10
東洋大	10	2	15	3
日本大	8		35	5
日本医大			1	1
日本獣医生命科学大			1	
法政大	38	8	24	3
星薬大	2		2	
武蔵大	10	3	1	
武蔵野大	2			
武蔵野美大			1	1
明治大	85	18	55	14
明治薬大	8	1		
立教大	37	6	9	3
立正大	2			
早稲田大	80	32	25	14
諏訪東京理大			1	
立命館大	8			
関西大	2			
近畿大			1	
計	499	114	333	84

大学校・専門学校

大学略称名	現合格	役入学	過年度卒合格	過年度卒入学
防衛医科大学校	1	1		
防衛大学校	2		1	
航空学生	1	1		

※3月31日集計分まで

部活動の主な戦績

柔道部

・全国高校選手権埼玉県予選個人戦
60 kg級ベスト8 郡山(2)
73 kg級ベスト8 船津(1)

・全日本ジュニア柔道体重別選手権出場 55 kg級 郡山(2)

・同窓会より激励金を贈呈

弓道部

・全国高校選手権埼玉県予選団体4位

個人戦 2位 堤優(3)

・全国高校選手権個人戦出場

・同窓会より激励金を贈呈

・県下武道大会

団体1位 川越A

団体4位 川越C

・県団体候補選手選考会 村田

(2) 選手となる

庭球部

・関東大会出場 大塚(3)人見(3)

硬式テニス部

・学総体県大会団体戦 ベスト16

陸上競技部

・県新人戦 800 M 4位

倉野尾(1)

やり投 7位 草村(1)

8位 相澤(2)

音楽部

・関東合唱コンクール 金賞

・埼玉ヴォーカルアンサンブルコンテスト 金賞

・吹奏楽部

・スチューデント・ジャズ・フ

エステイバル

優秀ソリスト賞 金平(2)

古典ギター部

吹奏楽部

・スチューデント・ジャズ・フ

エステイバル

優秀ソリスト賞 金平(2)

古典ギター部

・全国学校ギター合奏コンク

ル 金賞

・全国高総文祭代表選考会

ハーマニー賞

弦楽合奏部

・全国高総文祭代表選考会

ハーマニー賞

美術部

・県高校美術展優秀賞 全国大

会展 境(2)

・県美術展覧会 入選 江川(3)

将棋部

・全国高等学校将棋選手権埼玉

大会

団体戦 準優勝

西山(3)菅野(3)武田(2)

地学部

・日本地学オリンピック本選出

場

物理部

・県科学教育振興展覧会中央展

県知事賞・読売新聞社賞

大友(3)上原(3)至勢(2)武田(2)倉

本(1)高橋(1)正木(1)

新聞部

・全国高校新聞 年間紙面審査

奨励賞

・県学校新聞コンクール 優秀

賞・企画賞

川越中学校初代校長 増野悦興の謎(最終回)

滝澤 民夫(高18)

一九〇二(明治三五)年二月、川越中学校長を休職となった増野悦興は、不本意にも教育現場を去り、生徒と別離し、第二のふるさとを喪失した。故郷津和野を出て以来の悲哀だった。以後、東京での生活は自宅での青年育成、修養団体成民会の設立と機関誌『成民』の刊行、丁酉倫理会の『倫理講演集』への投稿、キリスト教のユニテリアン会派である同仁教会牧師としての秋田などでの伝道活動に費やされた。その潔癖な主張は時勢に容れられず、経済面のみならず、精神面、身体面でも窮迫の日々であったと思われる。

菌」や「遊廓投機市場等の噂をする手合」などは「主人より来訪を謝絶する」暮らしだった。清貧で謹厳実直な増野悦興の生涯を振り返ってみると、死の前年の一九一〇年に刊行された『高貴なる人格』に象徴されるように、その人生は人格の完成を希求し続けた一路であったといえる。これは日本近代のキリスト教知識人にとってある意味では共通の課題でもあった。

*

自由民権運動での挫折後、雑誌『文学界』を創刊し、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」「内部生命論」などで華々しく活躍した電影北村透谷は、創作と信仰と生活のはざまで懊悩し、基督教論を深めていたが、一八九三年一〇月に『聖書之友雑誌』の編集業務を七〇号で解任される。その直後、次の七十一号に北米から帰国した雷軒増野悦興の「聖書之保存」が掲載される。翌九四年五月、透谷は二五歳の若さで自ら世を去った。「聖書之友雑誌」での透谷最後の主要評論は「心の経験」(九三年一〇月)で、翌年霊南坂教会牧師を辞任直後の増野が『六合雑誌』一六六号に発表するのが「信仰的実験を論ず」(九四年一〇月)である。二四歳の北村透谷「心の経験」と二九歳の増野悦興「信仰の実験」はキリスト教の受容の過程での、よく似たキリスト教認識を示している。両者はキリスト教と聖書の教えを宣教師受け売りの形式主義ではなく、

そうしたなか、増野は〇七年一月、『六合雑誌』三三三号に「家庭生活実話」として、紀律厳正、用務自弁、虚礼排斥、臨機の権道、勤勉を家法となす、客種の撰択、からなる随筆を載せている。それによると、「家では晨起食事自修就寝等」それぞれ時間が決まっていた。「拙宅の玄関には「勤勉為家法」とう小生自筆の額面が掲げて有る」。婚礼の時には親友の牧師(安倍磯雄)の家で親友夫婦を媒酌人に立たせ、観客は一切招待せず、翌日披露状二百余通を知友に発送した。〇六年、娘の夭折に際しては、「妻と唯二人で棺に納め、夫婦で聖書を読み祈禱を致し、未明に小生一人車に附添ひ棺を護りて火葬場に参り、帰つて後に方々へ為知状を出しました」。「偽善と奢侈の徴

心の内面から咀嚼しようとしていた。そして、増野は日本ではじめて Personal God を「霊なる神」と訳した(佐古純一郎「近代日本思想史における人格観念の成立」とされている。このことから、北村透谷(内部生命論)―増野悦興(高貴なる人格)―西田幾多郎(善の研究)、という生き方の模索の系譜が成立するのではないかと考えられる。ギリシア哲学からスコラ哲学以来のキリスト教の「生命」は、第一義が神および神性で、第二義が善であるとされる。そこでいう「生命」は、社会的・生理的なものではなく、神に導く「道」として、「真理」としての「生命」であるという(湯浅慎一「キリスト教の生命観」)。近代に入って、良く生きることが善で、それが神の摂理に沿うと考えたのがカントだった。その哲学は日本では東京帝国大学哲学科の中島力造の紹介から広められた。増野悦興が川越中学校で倫理を講じていた時代は、神という存在を媒介しながら、真理や永遠の生命をどのように求めるかが、人生最大の課題だと考える青年が生まれた時代でもあった。

ちなみに、明治青年とキリスト教の受容からすると、増野悦興周辺の青年教徒の受洗時期は、増野が尊敬していた哲学者大西祝が一八七八年、逝去前後に妻子のために奔走した村井知至・岐阜中学校に増野を招聘した蔵原惟郭が七九年、増野および、同志社英学校の朋友安部磯雄・岸本能太夫・増野を看取る高田病院院長高田畊安が八二年、大阪

基督教青年会会長望月興三郎が八三年、若き日に日向教会設立で意気投合した岡山孤児院創設者石井十次・親交のあった家庭学校創設者留岡幸助・安中教会の増野の後任牧師柏木義円が八四年、すれ違った北村透谷が八八年である。岸本・村井・安部は川越中学校で講演をしている。

透谷は personality を品格と訳し、まだ人格という語は一般化していなかった。人格という用語は増野の時代に広がり、西田に至って青年の求める価値Ⅱ人格Ⅱ善として定着したといえよう。石川啄木の「時代閉塞の現状」が書かれた頃、日露戦後の浮薄な時代ゆえの要請が、増野の著作を「高貴なる人格」としたともいえる。夏目漱石が「現代日本の開化」を講演した二カ月後、教育者・キリスト者増野悦興は、四六歳で志半ばに肺結核のため他界した。

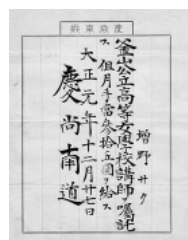
*

川越を去って五年後、長女文子を疫病で失った妻増野咲子は、さらに夫の死にも遭遇する。それから咲子は、一人息子肇の養育に明け暮れる後半生を送った。気丈で聡明な彼女は京都市立高等女学校(現堀川高校)、釜山公立高等女学校で英語を教えて生計を立て、後日、肇は早大教授に就任する。

増野の臨終間際、咲子からの危篤の報に、川越中学校の卒業



釜山高等女学校 増野咲子講師



1912年12月27日 釜山高等女学校 増野咲子講師委嘱状 (木村滋子氏蔵)

1911年10月10日付の増野咲子宛 岡田恒輔書簡 (木村滋子氏蔵)

一九一九年に川越中学校第七代校長に赴任した岡田は、恩師の一〇回忌に遺稿集『筆華舌英』を私家出版した。(完)

*「埼玉県第三中学校開校式前後」(云報五七号)以来一二回、連載の場をいただきました。資料掲載を快諾されたご遺族木村滋子氏・増野潤吉氏、ご配慮をいただいた同窓会事務局に御礼を申し上げます。

総会のご案内

日時 5月26日(日) 午前9時半より受付

会場 川越氷川会館(川越氷川神社内) 電話049-222-8417

総会 10時～ 三階鳳凰の間
 記念講演 11時～12時
 懇親会 12時15分～14時15分
 懇親会費 7000円

記念講演

演題 「未来への森林物語」

—森を通して社会的価値観の転換を考える—

講師 ^{かとうもりひろ}加藤衛弘氏(高26回) 筑波大学・生命環境系教授 農学博士

事務局より

叙勲受章者

●平成23年秋
 藍綬褒章

山口 昌孝氏(高16)

現・埼玉県調停協会連合会
 副会長、調停委員

●平成24年秋

旭日双光章

浅田 光二氏(中43)

元・志木市選挙管理委員会
 委員長

旭日小綬章

大久保義海氏(高6)

現・埼玉県商工連合会会長
 瑞宝中綬章

鈴木 宮夫氏(高10)

元・埼玉県副知事

図書等寄贈紹介

●木村 麗水氏(本名・加藤英明)(中41)

『山河はるかに』—俳句と小品

●清水 保夫氏(中44)

『清水保夫画集』

●森住 霞人氏(本名・恒二)(中48・高2)

小説『白い鳥』

俳文集『四季巡礼』

●小林 洋左氏(高3)

『ふたりはひとり』

—妻と歩んだ五十五年—

●日高 武美氏(高4)

『カオスの渦』(自分史)

●鈴木泰左右氏(高6)

『越辺川のいろどり』

—川島町の魅力を語り継ぐ—



●高野 澄氏(高9)

『サムライガール新島八重 維新を駆け抜けた烈婦の生涯』

●鏡 武氏(高14)

元・シリア大使

『中東紛争—その百年の相克』

●安藤優一郎氏(高35)

『山本覚馬—知られざる幕末維新の先覚者』

●山本覚馬—知られざる幕末維新の先覚者—



●沖方 丁氏(高47)

『光圀伝』

●鯉沼 拓氏(高63・東大生)

宇宙—わかりやすい『高校物理—力学・波動』

理—力学・波動』



●狭山初雁会(10周年事業)

安永郁郎氏(中34) 作詞・作曲による「狭山初雁会の歌」のCD



手の込んだ

振込め詐欺が

横行してます。

埼玉県立川越高等学校卒業生で息子と称して、最近連絡をとってないと思われる両親(40代から60代の方に多い)に対して、電話を掛けて来るケースが多くなっています。

被害にあわないためには、「家族の絆」が大切です。

「最近連絡をとっていない」という方は、ぜひこの機会にご家族の方と連絡を取り合います。そして、ご家族で「合言葉」を決めておきましょう。

また、新たな手口として警察官、銀行員等を装い、「カード預かります」とか「キャッシュカードの暗証番号」を聞き出すとするケースが多いです。

このような電話がありましたら、お近くの警察に連絡して下さい。警察は全力を挙げて撲滅のため取り組んでいます。

編集後記

この一月の直木賞に、沖方丁の「光圀伝」(角川書店)の受賞を私はひそかに期待していたのだが、残念ながら適わなかった。水戸藩主徳川光圀が主人公で、武家の嫡子相続を義とする一念を貫いた男の物語である。やや硬質だが、重厚かつ説得力ある作品だ。著者本名は藤野峰男氏(角川書店)は、本屋大賞を受賞し、映画化もされている。未読の方にはお勧めしたい。

今号の特集は、川高文化部、運動部OB会の現況と活動状況の様子を取り上げた。活動実態としては圧倒的に運動部のOB会活動が盛んであった。文化部はわずかに音楽部と美術部が活動しているに過ぎない。この特集は、OB会活動に踏み切れない未活動の他の部に奮起を促す意味も込めて特集にした。

「川高初雁の森」第一回植樹祭を十月に実施したが、その模様を表紙写真並びに本文記事で紹介した。同事業は埼玉県の森林づくりに協力するもので、同窓会では今後継続的に毎年植樹祭実施を予定している。

「川越中学校初代校長増野悦興の謎」の連載は今号で最終回となった。著者の滝澤民夫氏には長期間の連載に感謝申し上げます。(尾崎勝美記)